

根なし男の

フランスへの郷愁

松尾邦之助

生れついでに浮浪性の故か、わたしは、パリにいたとき、公園の無料椅子の上に新聞紙をしいて一、二時間の昼寝をしたことも度々あった。最近、パリ時代の親友、ダグイスト辻潤の書いた「浮遊不知所在」という六字を妻装して座敷にかかげたが、現在でも、わたしは静かな家庭生活をし、十八才になる娘の父親でありながら、心の奥底には、浮遊して所在を知らないといったルンペン根性からぬけ切らない。わたしにとっては、いたる所がわたしの家であって、同時に、いたる所が、わたしの家ではない。よくいえば、これこそ、正にコスモポリトの世界主義根性というものだろう。

パリは、というよりむしろ、フランス全土がこうした浮浪精神者のために実に快適な環境であり、い

までも、もし妻と子供がなかったら、わたしは、一切の野心、すべてのヒモをふり捨てて、フランスに行き、マロニエの花咲く、どこかの庭に骨を埋めたいと思う。フランス語には『デラシネ』(deracine)という字がある、「根をぬいた」という意味だが、同時に、伝統とか歴史にこだわらず、祖国を棄てた人間のことである。わたしは、ある意味で、この『デラシネ』の人間のように思われる。

何故フランスを愛するのか、それは、わたし自身にもよく分らない。恋人があるわけではなく、シャートオプリンや、ジゴ(羊のものと焼肉)や、ブーイヤベスや、お菓子の「エクレール」や、マロン・グラセが食べたいからでもないし、フランス娘が陽気で美しいからでもないようだ。よく考え、自分の

心を分析して見ると、いまいったようなデラシネさされた人間にとって、フランスには、住みよい環境があり、国籍や、家庭的身分やらにこだわらない、自由な人間が隣人となっているために、わたしの心が、フランスを呼んでいるように思われる。だからといった、わたしは自分の生れた日本がいやだというわけではない。コスモポリトで、デラシネされているために、逆に、わたしは自分の祖国を誰よりも深く愛している。また、浮浪根性だからといって家庭生活が嫌いだとは思えない。わたしが嫌っているのは、日本自体ではなく、日本のせせこましくも封建的な社会生活である。パリに二十年も住み、フランス女と恋愛生活をしたり、失恋したり質屋に行ったり、執達吏にいちめられたりしてこの国の裏の裏まで知りつくしたわたしではあるが、ここでは、異邦人としての呑気さもあつた故か、トコトンまで、自由な人間としての喜びを満喫することが出来た。

わたしは昨年の暮、パリからの帰路、クリスマス前後の約一週間を、南仏ニースで、旧友のフランス人技師の家に泊り、若いこの技師とその妻君、彼らの三人の子供(そのうちの二人は、ドモンジヨのよ

うに美しく、ニース生れのササールのように可憐な娘であった)と一語に暮し、クリスマス(フランスでのラ・ノエル)の夜を彼らと共に過ごし、娘から接吻され娘たちのつくった手製の御菓子をたべ(何と美事にうまいと思つた)車で、大家族と、ニースから山路づたいにイタリア境のマントンまで行き、モンテカルロを経て、海岸からニースに戻つたが、何と楽しい旅であつた……。デラシネされたわたしも、このような地に根を下し、家庭生活を楽しんだら……とシミジミ思つた。

「住めば都」などとあきらめた固定生活をするのもみじめだが、根をぬかれた木のように、所在なく浪々と生きるのも、どこかで、何かに絶望したあげくぐれだしたための悲しい潤燥かも知れない。

固定された生活の不自由な生活と、流浪の不安定を享受する「デラシネ」の自由な生活と、どちらがより多く幸福なのか、わたしにはよく分らない。だが、すくなくともわたしだけでは、このデラシネの心境の方がこよなく魅力的で幸福だと思われる。